

発音体感を生かしてことばの学びを深める取組

～力行音・サ行音・タ行音の発音体感とことばの意味理解との関係～

川上 綾子

昨年度の実践より、補聴器を装用している重度難聴児や、人工内耳を装用していても聴覚活用に難しさのある児童生徒には、唇の振動の強さや息の強さ・速さなどの発音体感を生かして、有声音と無声音の違いを体感する学習が有効であることが、児童生徒の発言やワークシートの記述などにより明らかになった。本稿では、実践をさらに進め、舌の動かし方によって発音が異なるk音、s音、t音の発音体感と、それぞれの音が含まれていることばの意味理解とを結びつけ、ことばの学びをより深める取組をした実践を報告する。

キー・ワード：発音体感 発音・発語指導 語感 言語指導

1 はじめに

近年、聴覚特別支援学校に在籍する、人工内耳装用幼児児童生徒数や中等度難聴の幼児児童生徒数が増加している。本校の全校幼児児童生徒数は、2015年度（平成27年度）は258名、2023年度（令和5年度）は186名と、在籍数は減少している。その中で、70dB未満の中等度難聴幼児児童生徒数と人工内耳装用幼児児童生徒数は増加している。一方で、100dB以上の重度難聴幼児児童生徒数は大幅に減少している（Table 1）。この表から、聴覚特別支援学校に在籍する幼児児童生徒の実態の多様化がより明らかになっていることが分かる。静かな環境であれば、聴覚フィードバック中心の指導が可能な幼児児童生徒が増加している一方で、聴覚以外の多感覚を活用し、発音・発語指導を行う必要がある幼児児童生徒も在籍しているということを日々の指導において実感している。

Table 1

本校幼児児童生徒の聴力の実態の推移

	70dB未満	70～100dB未満	100dB以上	人工内耳装用
2015年度	14名	98名	77名	69名
2023年度	18名	56名	25名	87名

多様化している幼児児童生徒の実態をふまえ、指導方法の工夫が必要となってきた。新年度に生徒に書かせた発音学習事前アンケートに、ある重度難聴生徒が、「清音と濁音の区別が難しい」と書いていた。この回答を受けて、新たな指導方法を模索している

ときに、黒川（2004）の「ことばの音は、肉体という物体が出す音であり、肉体に起こる物理現象なのだ。耳に聞こえてくる音に加えて、喉や唇の力加減、息の流れ、唾の混じり方・飛び方などの物理効果によって、私たちの脳には、爽やかな風の印象や、温かな開放感などが与えられる」という記述に出合った。この内容を発音・発語指導に生かすことができないか、児童生徒のフィードバックをもとに試行錯誤を重ね、指導法を確立したいと考えた。清音と濁音の組み合わせは複数あるので、まず、聴覚障害のある幼児児童生徒が最も習得しやすい、両唇音で半濁音であるパ行音とその濁音のバ行音の違いについて、昨年度実践した。p音は息の速さを意識して、唇の真ん中を振動させ、b音は重くゆったりとした感じを意識し、唇全体を振動させて発音するように伝えたところ、児童生徒から「発音するときの区別が付きやすくなった」という感想が得られた。したがって、発音体感を生かした発音・発語指導を聴覚障害のある児童生徒に実施することは有効であったということが示唆された。

今年度は、比較要素を変え、舌の動かし方が異なる3つの子音（k音、s音、t音）を取り上げ、発音体感を生かした発音・発語指導を行っていきたいと考えた。そして、単に発音要領を理解・習得することにとどまらず、発音体感とことばの意味理解とを関連付けて、ことばの学びを深める取組を行いたいと考えた。

こんなことが口の中で一しゅんの間に起こっているんだ・・・。

- ・か行だけではなく、さ行やた行などにも、「〇〇感じ」というものがあるのかな。
- ・特に強くかわいているのは、「か行」でした。発音は行によってそれぞれちがうので、おもしろいですね。
- ・今までか行の発音に注目してなかったけれども、今日の発音でやったので、いろいろなことに気づけたので、とてもよかったです。
- ・か行はやっぱりかたい感じ、強い感じ、かわいた感じを表せるからおもしろい。発音は楽しい。
- ・確かに、かかかかかと言うと、かわいた感じがする。

次に s 音の個別指導の実践を報告する。

<さ行音を味わおう> (黒川 2007)

- ① 舌を上の前歯のうらの近くにセットして、息を前歯のうらにこすりつけるようにして出す音。
- ② 口の中で、風が吹くように感じる。
- ③ 息が舌の上をすべる。つばと混じって、しっとり感も味わえる。
- ④ 息が速く出るので、スピード感も感じる。

さ行音を発音するときには、風のようなさわやかさ、スピード感、しっとり感、清けつ感を味わうことができます。

s 音の指導の際にも、児童には、「さ行音」と提示した。厳密には、「シ」の音の発音要領は s 音ではないが、s 音の「サスセソ」音と「シ」の音の発音体感には、ほとんど違いがないため、一緒に扱うことにした。すべての児童が「さ行音を発音するときに、口の中に風が吹いている感じを味わうことができる」と答えたので、児童にとって、s 音の発音体感（口の中で吹く風、爽やかさ、涼やかさ）は、他の子音に比べて感じやすいように見受けられた。授業後に、さ行音のつくことばを 5 つ書いてくるという宿題を課した。次の指導時に、書いてきた 5 つのことばを発音すると、どんな感じがするかを尋ねると、ある児童は、ことばの 1 つ 1 つに対して、「すくすく」はスピード感を感じる、「すらすら」はすぐにという感じがする、「しとしと」はしっとり感

を感じる、「さわやか」は気持ちがい感じがある、とすぐに答えることができた。このことから、この児童は、s 音の発音体感を味わうことができることばを積極的に探して書いてきたのではないかと推察された。

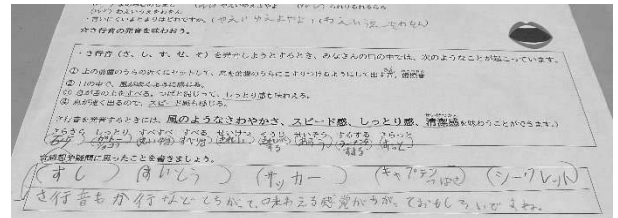


Fig. 3 s 音の発音体感のワークシート

s 音の発音体感を確認した後、プリントに書かれているさ行音のつくことばの語感を尋ねた (Fig. 3)。この児童は、「さらさら」ということばから「砂」を、「しっとり」からは「ガトーショコラ」を、「すべすべ」からは「丸いもの」を、「そうじ」からは「きれいにする」ということばをイメージすると答えた。語感を尋ねることにより、児童の発音体感の感じ方だけでなく、児童の感性や生活の様子を知ることができた。

s 音を学習した児童の感想の一部を挙げる。

- ・「さ」行には、さまざまな味わいがある、しかも「さわやかさ」がこれからの夏に合うんじゃないかなと思いました。
- ・さ行音もか行などとちがって、味わえる感覚がちがっておもしろいですね。
- ・さ行は川上先生が言っていたとおり、「風のようなさわやかさ」「スピード感」「しっとり感」「清けつ感」を味わうことができました。
- ・さ行音を言うと、きれいな感じがする。
- ・さ行音を発音すると、とても気持ちがいいです。
- ・さ行音を発音する時、じゅ業の時は感じたことが 1 つ 1 つだったけど、ぼくは正直全部感じました。次は何の行をするか楽しみです。

次に t 音の個別指導の実践を報告する。

<た行音を味わおう> (黒川 2007)

- ① 上あごに前舌をしっかりとつける。
- ② 舌に息を強く当てようとするとき、舌がふくらむ感じがする。
- ③ 舌の上のつばをはがすようにして、速く強く

下におろすので、ぬれた感じがする。

④ ねばりけも感じる。

た行音を発音するときには、かたさ、強さ、たくさんある感じを味わうことができます。

前述のとおり、小学生にはt音という表現が分かりにくいので、た行音という表現を使った。しかし、チの音、ツの音はた行音ではあるが、t音ではないので、児童には「た、て、と」音について学習することを伝えた。t音を体感させるために、小さく切ったやわらかいせんべいを前舌に乗せて、上あごにべったりとつけてから「た」「て」「と」と発音するように指導した。

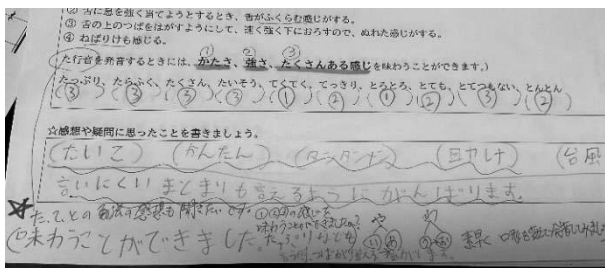


Fig. 4 t音の発音体感のワークシート

ある児童のワークシートからは、「たっぷり」と発音するときの舌の感覚を意識し、唾が増える感覚に「たっぷり」の量感を重ねて感じる事ができたことが分かった (Fig. 4)。

t音を学習した児童の感想の一部を挙げる。

- ・「た行音」は、なんだか「か行音」にも似たような感じ方だから、(僕としては) 聞き間違いが多いような気がします。
- ・た行はかたい音なのに、どうして「たぬき」にもついているのだろう。
- ・全部の音に味わえることがあるのかな？
- ・いろいろ味わえて面白いな。
- ・「た」って言おうとすると、舌が広がっている気がする。
- ・「たっぷり」などを言うとき、つばが増える気がします。たくさんある感じを味わうことができました。
- ・舌がふくらんで爆発にたえられなくて、下におろす感じが味わえた。舌を下におろしたとき、つばが残りたいって感じがしているからねばり気を感じる。

- ・「た」という一つの発音に様々な感覚があっただけでした。

- ・やはり、「かたさ、強さ、たくさんある感じ」は、ことばへの使われ方にも出ているな。

(3) 中学部3年生の指導

中学部3年生の指導は2人組で実施し、1回につき1つの子音について学習するようにした。

指導の手順は、ほぼ小学部の個別指導と同様に実施した。それに加えて、それぞれの音がつくことばと感想を授業時間内にワークシートに書かせ、その後ワークシートを交換して、友達の書いたことばや感想を読み合うようにした。

中学3年生は、ほとんどの生徒がk音を発音するときにかわいた感じ、かたい感じ、強い感じを体感できると答えていた。生徒たちには、「発音体感とことばの意味とがリンクしている」という表現を使って説明したところ、同じ表現を使って感想を記述した生徒が数名いた。また、「ことばの意味と口の中の様子が結びついている」というように、類似した表現を使って記述した生徒もいた。

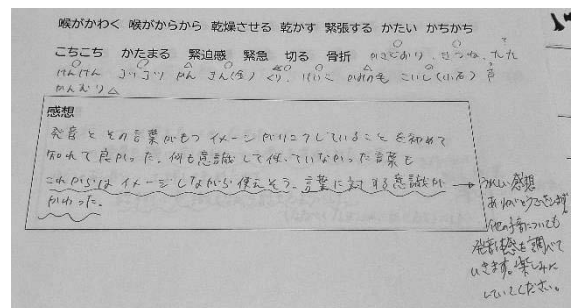


Fig. 5 k音の発音体感のワークシート (中3)

- ・か行のつく言葉だけでもいろいろな意味のある言葉があるとわかった。
- ・発音のイメージからむすびつけるものもあって面白いと思った。
- ・k音は、日常の中でも当たり前のように使っているが、今回の授業を通して、自然と意識しているのに、気づかないことにとってもびっくりしました。
- ・k音の意識が表れない言葉を区別しようとする、とても難しいなと思いました。
- ・か行は強めに発音するものが多い。
- ・か行について考えたことがなかったので、この授業を機に、別の行について考えを深めてみたいで

す。

- ・発音の体感と言葉の意味がリンクしている言葉があると知っておどろいた。
- ・発音とその言葉がもつイメージがリンクしていることを初めて知れて良かった。何も意識していなかった言葉もこれからはイメージしながら使えそう。言葉に対する意識が変わった。

次に、s 音の発音体感の実践を報告する。中3のほとんどの生徒たちが、s 音を発音する際に、爽やかさ、涼やかさを体感できると答えた。また、s 音の発音が難しいと感じている生徒の中には、発音体感が発音するときのヒントになっていると答えている生徒もいた。生徒が授業中に書いた感想を挙げる。

- ・発音するのが難しい音だと思う。
- ・涼やかな雰囲気があると感じた。夏のイメージがある。
- ・サ行音のつく言葉を思い出すときに、海、夏のイメージが強い言葉が多かった。
- ・さ行の「し」の言葉が個人的には一番力を入れていると思いました。
- ・特にさ行が連続すると吹く風が強いと感じられた。

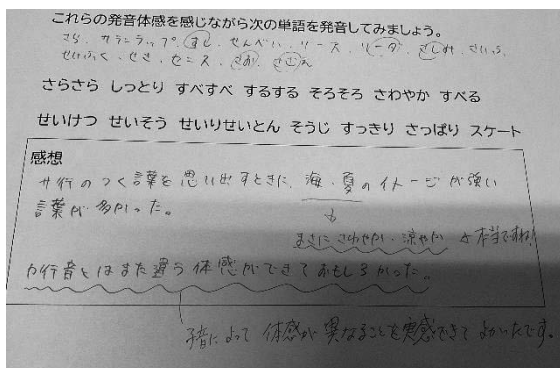


Fig. 6 s 音の発音体感のワークシート (中3)

- ・サ行は涼しいイメージがあるということを知り、カ行と比べても、やはり異なってくるため、面白いと思った。夏や冬の言葉に多いのかなと思った。
- ・さ行は涼やかな風が口から吹くイメージがあるが、色々と単語を並べてみると、涼やかに感じるものもあれば、少し温かく感じるものもあることに気がついた。
- ・前回やったカ行とはまた違い、口の中で吹く風などで意味合いが伝わる言葉もあった。あまり意識したことがなかったので、これからは意識してい

きたい。

最後に t 音の発音体感の実践について報告する。小学部の児童には、「たくさんある感じ」という表現を用いたが、中学生には黒川 (2007) の記述通り、「充実感」ということばを提示した。ほとんどの生徒が、感想欄に充実感を感じることができた」と記述していた (Fig. 7)。

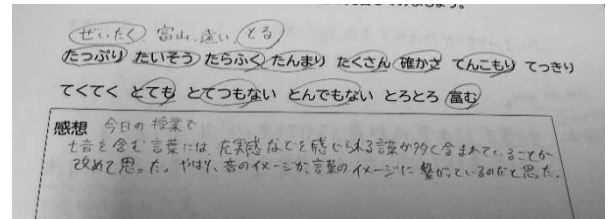


Fig. 7 t 音の発音体感のワークシート (中3)

授業中に書いた生徒の感想を挙げる。

- ・言葉の「意味」と「充実感」が繋がっていることばが多いと思った。
- ・接着点が破裂する直前、舌が風船のようにふくらむ。
- ・今まで気にせずに「た、て、と」を発音していましたが、言われてみれば充実感や手ごたえがあるなど新たに気づきました。また、た行が続く言葉は特に力が入るのかなと思いました。(例) てくてく、とろとろなど。
- ・t 音は発音するときに少したまを感じる。すぐには出ない。t 音のつく言葉は規模の大きいイメージが強くなった。(たっぴり、たくさん、たいこなど)
- ・t 音は自分にとってうれしい (達成感を感じる) 時に発する音が多いと思った。
- ・今日の授業で、t 音を含む言葉には、充実感などを感じられる言葉が多く含まれていると改めて思った。やはり、音のイメージが言葉のイメージに繋がっているのだと思った。
- ・t 音はとても読みやすい印象が強かったが、今日の勉強を通して、粘りのあることに気づき、そこから生まれる、t 音を含む単語の読み方や聞こえ方に違いがあることに気づいた。
- ・t 音は舌の状態や動きが大切なのだと分かった。t 音の次に「ん」などがくると感じやすかった。

3. まとめと今後の課題

発音・発語学習をする際に、発音体感を味わい、発音体感とことばの意味との間には、深い関係があることを知った児童生徒は、驚きと感動を表情や言動で表していた。このことから、発音・発語指導の際に、発音体感を提示することは、聴覚障害のある児童生徒にとって、効果的であることが示唆された。中3生になると、k音のかわいた感じを容易に感じられることが分かった。一方小学生には、かわいた感じを自覚的に感じるのが難しいケースもあった。これは、自己の発音を体感する学習は、児童生徒の聴覚フィードバックの状況や、自分の口の中を直視したり触ったりすることができないこと、児童生徒の個々の発達による感覚の確かさなどのさまざまな要因が関係していることが考えられる。しかし、自覚的に発音体感を味わうことが難しい小学生段階であっても、発音・発語学習の際に発音体感を提示することには、少なからず価値があると考ええる。

発音体感を学習した後のことば集めの学習では、より発音体感を感じられることばを選ぶとする児童生徒が見られた。ある中学生の「か行のつく言葉がもつイメージを想像すると、話すときの言葉選びもしやすくなるかもしれない。」という記述からは、発音・発語学習で学んだことを日常生活に生かし、より伝わりやすいことば選びをしようとする意欲を感じた。このことから、発音・発語指導の際に、発音体感を提示することは、児童生徒にことばの意味を深く考えさせる機会となり、言語指導の1つの方法になりうるということが言えるのではないかと考える。

課題として次の3点を挙げる。1点目は、児童生徒の学習年齢や言語力を考慮して、発音体感を表す文章を作成したが、ある児童生徒にとっては、発音体感を感じることが難しい場面が見られた。今回提示した文章より、さらに児童生徒に分かりやすい表現を追求していくことが必要だと考えた。2点目は、発音体感とことばの意味との結びつきが薄いことばの扱いについてである。今回の実践では、発音体感とことばの意味との関係に焦点を当てたかったため、ことばの選定に関しても、あえてつながりが薄いこ

とばを避けて授業を行った。ある児童は、「た行はかたい音なのにどうして『たぬき』にもついているのだろう」という疑問をもった。今後はつながりが薄いことばの存在も提示し、児童生徒とともに発音体感とことばの意味との関係を考えていく必要があるのではないかと考える。3点目は、発音体感を生かした発音・発語指導の継続性についてである。発音体感とことばの意味との関係を学習した直後には、児童生徒が驚きや感動を表現する場面が見られたが、継続的な指導を行わないと、一時的な感動になってしまう心配があるのではないかと考えた。というのは、児童生徒がことばを発するたびごとに、発音体感を味わいながらことばを発しているとは考えにくいからである。したがって、発音体感を生かした発音・発語指導を継続的にを行い、児童生徒がことばの意味理解を通して、ことばの学びをより深めることができるよう支援していくことが大切だと考えた。今後も、指導者自身が発音体感を十分に味わいながら、児童生徒への指導を丁寧に行っていきたい。

本実践は、今年度実施された第58回全日本聾教育研究大会、研究協議分科会、自立活動Ⅰ（聴覚活用・発音発語）において発表の機会を得た。助言者である大東文化大学教授 斎藤友介氏からは、『「怪獣の名はなぜガググゴなのか」というユニークな著書をヒントに聴覚障害のある児童生徒の発音・発語指導を行った実践である。発音体感を感じやすい、または感じにくいということは、認知的なスタイルによって違ってくるのではないかと。WISCやK-ABC等での実態把握をしてもよいのではないかと。」との助言をいただいた。

2024年11月に、本校小学部児童39名に発音明瞭度検査を実施した。児童の聴力データとk音とs音とt音の発音明瞭度との関係を以下の表に示した。

Table 2

2024 年度小学部人工内耳装用児数・補聴器装用児
良聴耳平均聴力分布及び k 音・s 音・t 音の発音明
瞭度

	20%未満			20～40%未満			40～60%未満			60～80%未満			80～100%未満			100%		
	k	s	t	k	s	t	k	s	t	k	s	t	k	s	t	k	s	t
人工内耳	3	4	2	0	3	0	1	0	0	3	3	4	4	0	0	12	13	17
70dB未満	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	3	2	2
70～90dB未満	2	5	3	0	0	1	1	0	1	3	0	0	0	0	0	6	1	7
90dB以上	1	1	1	0	2	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	2

この表から、k 音の発音明瞭度が 80%以上の児童は、小学部全体の約 70%、s 音の発音明瞭度が 80%以上の児童は、約 41%、t 音の発音明瞭度が 80%以上の児童は、約 72%である一方、それぞれの音の発音明瞭度が 20%未満の児童も存在することが明らかになった。しかし、発音・発語指導では、発音明瞭度を上げることにはこだわりすぎることなく、発音体感を生かした言語指導を継続し、児童が日本語を楽しく学べるような工夫をしていきたい。

12 月には高等部普通科 3 年生にも発音体感を生かした発音・発語指導を実施した。生徒の感想を以下に挙げる。

- ・普段意識しないことだったが、「言われてみれば！」という納得感が強かった。実際にはそう聞こえないオノマトペがやけにしっくりくるのもこういった音の性格が背景にあるからなのかなと考えた。他の音のイメージについても興味が湧いた。
- ・発音をする時、一瞬口の中でどんな現象が起きてこんな音が出せるのか意識したことがないので、ここに書かれている説明が分かりやすくて、ためになったなと思いました。
- ・か行に対して苦手なイメージを持っていたけど、どこを気を付けるのかしっかり文が書かれていたので、分かりやすかった。そのため、か行に対する苦手なイメージがなくなるかも。
- ・k 音と t 音は声に出すことはできるが、s 音、サ行は苦手意識があったので、今回コツが分かり、これから安心して声に出すことができると思いました。
- ・発音のしかたと言葉の意味に関連性があるのはとても興味深い。他にもないか、日頃の会話で気づけるかもしれない。

- ・言葉のイメージが口の中で起こっていることとつながっている所が面白いと感じた。言葉をイメージしながら発音していきたいと思う。
- ・苦手な s 音のしくみを改めて学びなおすことができたのでよかった。
- ・k 音は確かに緊張していたけど、s 音は息が通るので爽やか、t 音は弾けるように発音しているのが分かって勉強になった。

生徒たちには、苦手な音に対して発音体感を含めた発音要領の細かい説明が役に立ったことが、感想の記述より読み取れた。今後も発音体感を生かした発音・発語指導や言語指導の実践を積み重ね、児童生徒に日本語の面白さや魅力を伝えていきたい。

【付記】

本研究は、筑波大学附属聴覚特別支援学校の研究倫理審査会の承認を得ている。

【引用・参考文献】

- 山縣浅日・木村淳子・寺井 寛・久川浩太郎・藤本裕美子・石井清一・橋本時浩(2016) 平成 27 年度聴覚活用委員会の取り組み. 筑波大学附属聴覚特別支援学校紀要. 38, 138-144.
- 杉山砂寿・林 徳子・川上綾子・飯塚和也・數馬梨恵子・長島素子・中坂聖・鎌田ルリ子・桑原徳子・山中健二(2024) 令和 5 年度 幼児児童生徒の聴力の実態及び聴覚活用委員会の取組 良聴耳平均聴力の分布および人工内耳装用者数・補聴だより発行の(2)取組. 筑波大学附属聴覚特別支援学校紀要, 46, 74 - 80.
- 黒川伊保子(2004) 怪獣の名はなぜガググゴなのか. 新潮新書.
- 黒川伊保子(2007) 日本語はなぜ美しいのか. 集英社新書.
- 黒川伊保子(2019) ことばのトリセツ. 集英社
- 板橋安人(2021) 聴覚障害教育論手記, 発音・発語の学習指導の知識と実践. ジアース教育新社.
- 川上綾子(2024) 発音体感を生かして学ぶ楽しさを実感させる取組～パ行音とバ行音を通して～. 筑波大学附属聴覚特別支援学校紀要. 46, 27-32.